

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370631

研究課題名(和文) 成人に対する多読の有効性検証と大学アウトリーチ活動としての多読教育モデル構築

研究課題名(英文) Extensive reading for adult students: Development of an extensive reading educational model as a university outreach program

研究代表者

岡本 清美 (Okamoto, Kiyomi)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：20533631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：企業活動のグローバル化により企業における英語教育ニーズに対して、近年大学等を中心に注目を集めている英語多読が有効かを検証するため、大学アウトリーチの枠組みを用いて企業内英語多読教育モデルの構築と日本国内2都市において実証実験を行った。様々な教育モデルを試した結果、大学(研究者)と企業が直接契約等を結ぶ形態より、地域経済団体等を介したモデルの方が、教育提供側(大学)と受講者(企業)の方法にとって利点があることが分かった。

研究成果の概要(英文)：As more Japanese companies go global, their need for English language education program has also been growing. To find out if extensive reading (ER), now popular in universities in Japan, is valid in the company education context as well, we undertook the development of an educational model using ER as a university outreach program for local business communities and experimented it over the course of four years in two Japanese cities. We concluded that it is more practical and beneficial for both the program provider (university) and the participating companies to have an intermediary body, such as local business associations which have strong ties with the local business community, hosting an ER course.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語多読 大学アウトリーチ 企業内英語教育 成人教育

1. 研究開始当初の背景

企業活動のグローバル化により、多くの企業が社員の英語力向上に興味を持っているが、学校教育を中心に発展してきた英語教育学分野では、学卒者に対する研究は限られている。しかし、仮に英語試験の点数が同じでも、学卒者と学生では例えば英語学習歴に差があり、同じ教育手法が両者に等しく有効かどうか、確認が必要である。近年大きな注目を集めている多読も学校での研究に集中しているため、本研究では多読が EFL 環境の社会人学習者、特に企業内教育においても有効か、様々な角度から検証する。加えて、多読の特性を活かした大学アウトリーチ活動としての遠隔多読教育モデルの構築を行い、企業規模・地理的条件に左右されない企業内英語教育モデルの開発を目指す。

2. 研究の目的

多読を用いた企業内英語多読教育モデル開発を目指し、主に以下の点について検討を行う。

大学アウトリーチとしての英語多読を用いた英語研修プログラム(以下プログラム)について、実施運営をどのように行うべきか。

大学と参加企業間、ならびに参加企業間のコミュニケーションはどのように行うべきか。

3. 研究の方法

国内2都市において、地域企業に対して地元大学をハブとした遠隔多読教育実践を行った。国内2都市において教育実践を行ったのは、本教育モデルの実行性並びに一般性を検証するためである。

本教育モデルの概要は以下のとおりである(図参照)。ハブである大学で多読図書と多読管理システムを用意し、参加企業に提供する。つまり、大学で多読図書を用意し、参加企業に貸し出すシステムである。これは、毎年均質な学習者集団が新しく加わる学校とは異なり、学習者の入れ替わりがほとんどない企業という文脈では、自社で大量の多読

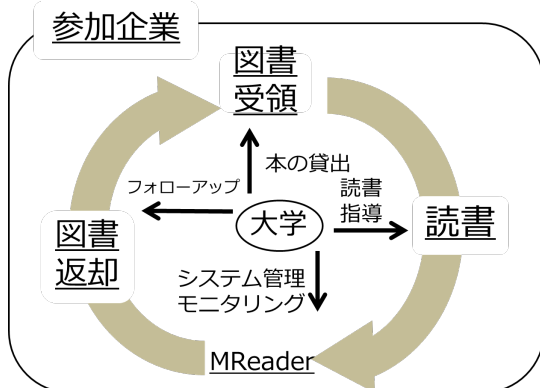


図. 本プログラムの受講モデル図

図書を揃えることに対する経済的合理性が非常に低いためである。また、仕事や家事で忙しい参加者のために、多読そのもの以外の時間的負担を極力減らすシステムを目指した。具体的には、図書のやり取りは郵送で行うことで、参加者は講座に参加するための移動時間が不要となり、その時間を多読に充当することも可能となる。また、参加者の多読記録管理を簡便にするため、オンライン多読管理システムである MReader を用いる。これにより、大学は参加者がどのように多読を行っているかをログ等からモニターすることが可能となる。

4. 研究成果

1 結果

上記2「研究の目的」の項目番号ごとの検討結果は以下のとおりである。

プログラムの実施運営手法については、当初は大学が個々の企業で講座を実施する方法(直接型)を取っていたが、期間中に商工会議所などの地元経済団体等が主催する講座の講師として大学が関与する方法(間接型)が加わり、現在は2つの形態で運営している。

直接型の場合、当方の活動に興味を持った企業が大学に直接問い合わせを行い、大学と企業間で講座内容に合意した場合に講座を開始する。間接型の場合は、主催団体と大学が講座の日程・募集人数等を協議し、主催団体が講座参加者を募集する。参加を希望する企業は主催団体宛に申し込みを行う。

直接型・間接型の大きな違いは、大学と企業間に契約と金銭の授受が発生するかどうか、である。直接型の場合、講座受講料を企業から大学に払い込んでもらうために、受託研究等何らかの契約を大学と企業間で締結する必要がある。そのため、企業規模や参加人数によっては、講座の実施に二の足を踏む企業もあった。一方、間接型の場合は、企業は主催団体の口座に参加申し込みを行い、受講料を支払うだけでよいため、従業員一名

	新規	継続	合計
2015-1	20	-	20
2016-1	15	6	21
2016-2	11	19	30
2016-3	0	16	16
2017-1	13	9	22
2017-2	31	22	53
2017-3	39	4	43
2017-4	15	29	44

表. 間接型プログラム参加人数一覧 (2015年~2017年度)

のベンチャー企業や、公官庁・各種団体の有志グループなど、幅広い層に本プログラムを提供することが可能になることが分かった。

企業に対して行う本プログラムと、大学等で行う多読プログラムの最大の相違点は、多読を行う期間である。大学の授業で行う場合は、普通半年（15週間）、通年クラス最長1年の開講期間の終了とともに参加者である学生は多読をやめるが、企業では学期や学年という枠がないため、参加者の意思・希望により、講座受講が長期間になることである。（間接型プログラムでは、2015年6月から2018年3月までの継続受講者が3名いる。）ただし、プログラム参加者のうち、一定数は初回の講座受講中に多読をしなくなることで、また、参加中に業務や家事都合で継続を断念・またはいったん中止する参加者もあり、これらの層にも対応できるプログラムの期間設定が必要であることが分かった。

そこで、間接型プログラムにおいては、現在、年に4期・各10週間の講座を開講し、新規参加者にとって受講開始機会を増やすと共に、受講をやめる機会も提供することが可能となった。一方、継続受講を希望する参加者には次回講座開始時まで図書継続貸し出しをすることで、学習を途切れさせないこともない。

このように、間接型プログラムは大学側のプログラム運営と参加者である企業側の利用ニーズに適應したため、多くの受講者、特に数期に渡り継続して受講する参加者が多くなった（表参照）

普段は対面ではなく遠隔でプログラムを運営するため、大学と参加者間、そして参加企業間のコミュニケーション手段を用意することは、プログラムの成功に重要であると考え、様々な試行を行った。

#### （1）開始時説明会

講座開始時に2種類の説明会を行うことが有効と分かった。第一に、企業の教育研修担当者を集めた説明会を行い、企業内の受講ニーズを検討してもらう機会を設けている。次に、先の説明会に出席した教育研修担当者から推薦を受けた、また自ら講座の受講を希望した参加者を集めた説明会を行う。後者では、実際に多読図書を読み、MReaderを使ったハンズオン研修を行うことで、講座受講の手順だけでなく、これまで慣れ親しんだ英語学習法とは大きく異なる多読とMReaderへの心理的障壁を取り除く必要がある。特に、ICTスキルが十分ではない参加者については、端末の操作やキーボードの入力方法から教える必要があることも分かった。

#### （2）修了時研修

間接型プログラムは、毎年3期から4期の講座を開講しており、毎回講座終了時に、希望者を集めて、修了時研修を行うことで、参加者間の交流の場を設けている。研修では、

多読以外の英語教育についての最新情報の提供だけでなく、多読を含む英語学習について参加者間で情報交換を行っている。遠隔で多読を行うプログラムでは、参加者は孤独な学習になりがちなため、参加者間の交流の場を設けることを参加者が高く評価していることもわかった。

#### （3）オンラインコミュニケーション

利用者間のコミュニケーション手段として、FacebookやKintoneなどSNSやグループウェアを試行的に導入したが、どちらも採用には至っていない。Facebookなどの一般に普及しているSNSで本プログラム参加者用グループを作るのはもっとも簡単ではあるが、全ての参加者が利用しているSNSがないだけでなく、すでに利用している参加者も、個人のアカウントで仕事の一環である本プログラムに参加することを望まない人や、そもそもSNSを利用していない人、したくない人もおり、実用は難しいと判断した。

次にKintoneというオンライングループウェアの導入を試みたが、参加者に一定以上のITスキルが必要であり、また、社内セキュリティに抵触するという理由で導入できない参加企業もあったことから、こちらも実用とはならなかった。

一方、多読図書の送付リストや各種案内文書等を大学と参加企業間で共有するために、Dropboxの共有機能を利用した。利用開始時の共有設定以外は特段の操作が不要な点や、大学側のユーザビリティは高い。また、エクセルやワードなど一般的なアプリケーションで利用できる点が、参加企業からは便利であるという声が多かった。しかし、Dropboxも社内規定により利用できない企業があり、その場合はメールなどによるデータ提供が必要になった。このように、一つのオンラインシステム（サービス）で、多くの事業者が関わる本プログラム参加者のニーズを充足することは困難であることがわかった。

#### 2 まとめ

本教育モデルは、様々な理由により自社で英語多読教育の提供が困難な企業に、地域の大学が多読図書の貸与などの学習環境を提供するものである。4年間の教育実践を通して、改善が必要な点はあるものの、本モデルは実用可能であることがわかった。今後は、さらに多くの企業・事業者へ本プログラムの案内を通して、ニーズの掘り起こしを行い、地域経済のグローバル化に貢献したい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4件）

岡本 清美・金子 恵美子・ロブ トーマス・

辻井 洋行, (2015). 「大学アウトリーチ活動としての企業内多読教育モデル構築」大学英語教育学会第 54 回国際大会, 鹿児島大学 郡元キャンパス.

Kiyomi Okamoto, Emiko Kaneko, Thomas Robb & Hiroyuki Tsujii. (2015). Extensive Reading at Work: An ER Approach to Employee Training of Small Business, Extensive Reading, Third Extensive Reading World Congress, Higher Colleges of Technology, Dubai Men 's College, Dubai, UAE.

Kiyomi Okamoto & Emiko Kaneko. (2016). Providing Language Learning Opportunities to Small Companies through Hibikino Extensive Reading Outreach (HERO), PanSIG 2016, Meio University, Nago, Okinawa.

Kiyomi Okamoto, (2016). 「アウトリーチで広がる多読の輪 Extensive reading opportunities through educational outreach」, Plenary Talk for the 9th Annual Extensive Reading Seminar, Nanzan University, Nagoya.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

岡本 清美 (OKAMOTO, Kiyomi)  
北九州市立大学基盤教育センター・准教授  
研究者番号：20533631

### (2)研究分担者

金子 恵美子 (KANEKO, Emiko)  
会津大学 コンピュータ理工学部・教授  
研究者番号：30533624

ロブ トーマス (ROBB, Thomas)  
京都産業大学外国語学部・名誉教授  
研究者番号：30148366

辻井 洋行 (TSUJII, Hiroyuki)  
北九州市立大学基盤教育センター・准教授  
研究者番号：20364143